

最優秀充実賞

第一回神戸大学文窓会 学生レポートコンテスト

ディベートを通して世界が見える

文学部人文学科英米文学専修 塩見実加 (04900451)

ディベートを通して世界が見える

04900451 塩見実加

“Thank you very much, madam speaker and honorable judges. Good morning, ladies and gentleman in this house. Today I am standing here to express strong opposition against the death penalty.”

大学入学当時、まさかこの私が外国の地で大勢の聴衆を前に、英語スピーチをすることになろうとは思いもよらなかったであろう。大学三回生の春、私はマレーシアのランカウイ島で行われた英語ディベートの全アジア大会、All Asian Debating Championship に出席した。この大会にはアジア 12カ国、44大学から 100名を超える学生たちが集まった。神戸大学からも私を含めた六人が参加した。英語ディベートとの出会いは偶然であったが、私の人生に多大な影響を与える経験となった。以下、英語との出会い、ディベート漬けの日々、ディベートを通して考えたこと、見えてきたものについて振り返ってみたい。

一年間の受験浪人生活を経て神戸大学に入学した私は、大学では必ず英語をマスターしようと決意していた。大好きな英語を流暢に話せるようになりたかった。そこで目標を達成すべく、私は英語研究部 ESS の扉を叩いたのだった。

ESS (English Study Society) は部員 100名を超えるマンモス組織である。英語力の向上を目的とし、英語を使って活動をするディベート、ディスカッション、スピーチ、ドラマ、カンバセーションの五つのセクションで構成されている。その中で、私を最も魅了したのはディベートだった。パーラメンタリーディベート(Parliamentary Debate)と呼ばれるこのディベートはイギリス議会(Parliament)を模したもので、二人一チームで戦う。討論者はくじによって肯定側 (Government Side) と否定側 (Opposition Side) に分かれれる。ゲームが始まる前にお題(motion)が発表され、二十分の準備時間を経て英語での答弁が始まることだ。このお題は分野が多岐にわたる。死刑や安楽死の是非のような古典的なものもあれば、靖国参拝、イラクへの自衛隊派遣などの現代時事を扱うこともある。二十分という準備時間は長いようで短い。今まで考える機会のなかった問題について考え立論する。そして理路整然と英語で即興スピーチするのである。

私は自身の英語力を多少自負するところがあったが、その自信はディベートによって打ち砕かれた。初めて経験したディベートのお題は中絶の是非だった。それはまさに一種の恐怖体験だった。なぜ受精卵は生命とみなすことができるのか。望まれない子どもが生まれてくることは幸せなのか。どう論理を組み立てればいいのか分からない。また、喋りたくても英単語がでてこない。受精卵(fertilized egg)、生命倫理(bioethics)など知る由もない。それだけではない。相手の言うことが聞き取れない、反論が思いつかない。それでも自分のスピーチ番がやってくるのである。壇上にあがった私は呆然と立ち尽くし、手に汗にぎり、単語を何とかつなぎ合わせて話さざるをえなかった。上手くできない屈辱感が私のディベートセクション入りを決めた。余りの悔しさに、このまま挑戦せずに引き下がるのは

嫌だったのだ。

ディベートセクション練習は楽ではなかった。三つの練習が必要だった。第一に時事問題のリサーチである。前述したように、ディベートでは国内、海外を問わず様々なトピックを議題とする。それゆえ、新聞と *Newsweek* を継続して読んだ。第二に、英語の勉強である。それまでの英語学習は読み書きを中心で、英会話は得意ではなかった。そこで毎日最低一時間ニュースのリスニングを三年間継続した。通学時間は往復で三時間かかったが、この時間がリスニング練習のために貴重だったため大学近くに住むことは考えなかった。第三に、ディベート試合の練習である。授業のない空き時間に人を集めて練習した。空きコマや放課後を使い、ほぼ毎日試合をする。放課後の練習に参加するため、私は深夜にアルバイトをした。レストランで夜九時から午前三時まで働き、三、四時間寝て授業に出る。当時は少しでも多く練習したい一心だったので、体力的にも精神的にも不思議と辛くはなかった。

ディベートで特に印象的だった議題がある。“*This house should forgive national debt of developing countries.*”（開発途上国に国債を免除すべきである。）肯定側にいた私は、「日本のように豊かな国が途上国を支えるのは当然の責任である。国債返還を免れれば、途上国政府はその分のお金を社会インフラの整備や衛生向上に使えるはずだ。」などと話した。しかし練習の帰り道、私は自身の中で何か違和感を覚えていた。以前から国際協力に興味はあったものの、実際には何も知らない。ボランティアなどやったことがない。日本の責任が何なのかよく分からない。何も知らないのに雄弁に語るのはただの偽善ではないのか。

このディベートをきっかけに、インターネットで検索してNPO発祥の地アメリカサンフランシスコでのボランティア留学に参加した。たった二週間のプログラムだったが、とても内容の濃いものだった。ホームレスの方への食事提供、市民の方に混じって週末の植林、孤児の子どもたちと遊ぶプログラムなどを体験した。四度目の訪米だったが、この留学でアメリカに対するイメージは大きく変わった。世界で最も豊かである反面、格差社会は広がっていた。ワーキングプラーの人たちが多くおり、ホームレスの人数も日本より格段に多い。高級ブランド店が立ち並ぶ通りから一筋奥へ入れば、そこには小さなアパートに何十人の浮浪者たちがすし詰め状態で住む地域があるのだ。

ショックな場面にも何度も立ち会った。中でも印象的だったのは教会で子供たちと遊ぶボランティアのことである。私達は折り紙を教えていた。子供たちは可愛いく親しみがあり、折り紙を大変喜んでくれた。私が折り紙で飛行機を作つてあげると、隣にいた女の子が飛行機を見たことがあるという。「どこで見たの。」と問いかけると、“*When my family's gone.*”（「私の家族が行ってしまった時に。」）と答えたのである。私は何と答えればいいのか途方にくれた。楽しそうに折り紙で遊ぶその女の子が家族と離れ離れる悲しい体験を背負っているのかと思うと胸が詰まった。しばらくして保護者の方がお迎えに来られたが、黒人のその子を迎えてきた母親の肌の色は白かった。その他にも、明らかに組み合わせが違う親子がたくさんあった。豊かな国アメリカの貧しい人や孤児が多くいるという側

面を垣間見た。しかし同時に、アメリカはやはりボランティア先進国であった。多くの問題に対して様々な地域や団体が向き合って活動しており、日本も学ぶべきことが多くあると思う。

このボランティア体験プログラムを通して自身を振り返ってみた。私はこれまで困っている人たちの問題を真剣に考えてみたことがあつただろうか。何もしてこなかったのではないか。これからは自分も社会に対して何かしなければならない。何をすべきか考えるためにも、より色々な問題を知り、困っている人の視点で学ばなければと思った。そこで帰国後、再びディベートに打ち込んだ。今度は勝負を分かつ單なるゲームではなく、色々な視点で物事を見る訓練としてディベートに臨むようになった。

そして五月。神戸大学ESSディベートセクションはマレーシアで行われたアジア大会に初めて出場した。マレーシア、タイ、バングラディッシュ、インド、シンガポール、インドネシア、日本、韓国、中国、台湾、イエメンから学生たちがランカウイ島に集まった。一週間にわたる大会で多くの試合を行った。国際大会には国内大会と違う面白さがあった。

まず英語の壁である。国際大会では日本人の英語のレベルは他国学生に比べて低いと言わざるをえない。アジアの多くの国では英語が第二言語であることも一因であろう。しかし、だからといって負けてはいられない。英語が苦手でも話の構成を工夫することで我々も十分対等に戦うことができた。

イランの核保有是非を議論した時の相手はインドであった。核保有国であるインドを目の前にして核保有の非正当性を主張することは少し勇気が必要だった。またマレーシアの観光産業としてストリップショーの是非を討議したものもあった。マレーシアはイスラム教国であり女性が肌を見せるという行為自体が許されない。話の前提が日本の場合とは違い、とても興味深かった。

中でも最も印象的だったのは予選が終わって決勝戦である。マレーシア対インドが「アメリカは軍事費を削減するべきである。」という議題のもと試合が行い、沖縄米軍基地に論点が絞られた。彼らのディベートは素晴らしいかった。英語力もさることながら、日本について実によく知っていた。沖縄にはいくつ基地があり維持費用はいくらで、何年にアメリカ兵による少女暴行事件が起り、その事件に関する裁判が何年に大阪で開かれ…というように極めて詳しいのである。彼らの国際問題に対する関心の高さ、知識の深さに脱帽した。

ディベートの試合以外の場面でも、多くの交流があった。大会中、ほぼ毎晩交流会が催された。学生たちがそれぞれの国の民族衣装を着て文化紹介をするカルチャーナイト。日本は浴衣や新撰組の衣装を着て参加したのが好評を得て、一緒に写真をとってほしいという他国学生の行列ができた。その他、現地マレーシアの学生が夜店や海に連れて行ってくれたこともあった。大会中多くの友を得たが、中でも思い出深いのは一人のマレーシアの女の子と話したことだ。彼女はイスラム教について詳しく話してくれた。頭を隠すベールは父親以外の男性の前では決して見せないこと。イスラム教に高い誇りを持っていること。

日本人は無宗教である傾向が強い。このことを話すと、彼女は「私たちは死ぬことを日常的に考え、死後に報われるために善行を重ねようとする。実加は死ぬことが怖くないのか。」と聞いてきた。日本人は日常生活において死について考えたり言及したりすることに必ずしも積極的ではない。文化の違い、宗教の意義を考えさせられる体験になった。

このアジア大会は本当に有意義であった。色々な背景をもったアジア中の学生たちが集まり、世界の問題について膝と膝を突き合わせて真剣に議論しあう。ディベートを離れるとき国籍関係なくいい友達として、家族について、大学について、恋愛について語り合う。日本では気付かなかつたことに気付き、多くの異国の友と心を通り合わせた。

ディベートを通して、様々なことが見えてきた。世界には議論すべき課題が山積みであり、またどんな事柄にも二面性があると知った。世界の問題について考え、そのことから逆に日本を知り、自分自身のやるべき事が見えてきた。肝心の英語力はどうであろうか。長期留学の経験もない純国産の私が、入学当時 550 点だった TOEIC の点数を 940 点まで伸ばすことができた。どうやらディベートは英語力向上にも有用なようだ。

ディベートとの出会いにより、私は多くを学び体験することができた。ディベートは単なる言い争いではない。自分以外の人の立場で悩んでみる機会であり、世の中をよりよく変えていける可能性を感じる力だと私は考える。相手を言い負かすのではなく、議論を通して最善の妥協点を探ることが目的であるはずだ。私は将来、国際協力に携わりたい。そして当事者の声に耳を傾けながら、よりよい社会とは何かを考える自分自身とのディベートをこれから先も続けていきたい。学生英語ディベートはまだまだ歴史が浅い。しかし、今後ディベートを通してより多くの若者が真剣に世界の将来について考え、意見を戦わせ、互いに親しみの輪を広げていくことであろう。それが世界の諸問題の平和的解決を進める礎になることと信じている。

優秀充実賞

第一回文窓賞 学生レポート

「新しい言語世界の扉を開く」

学部：文学部人文学科哲学専修4回

学籍番号：0450114L

氏名：八幡さくら

神戸大学に通い始めてからはや四年目になる。京都の自宅から約2時間かけて通う道のりも今では慣れた。長い坂道を登って大学から見下ろすと、なだらかな斜面に沿って住宅が立ち並ぶ神戸の町並みを、そして、その先には港と穏やかな瀬戸内海を望むことができる。山と海に挟まれた自然あふれる環境にある、この大学の文学部で、私は今哲学を学んでいる。外国語の文献を読み、調べる、根気強く考えるという繰り返しである。難解なテキストを理解するのは大変難しいが、理解できた時の喜びは、何にもまして得がたく、達成感がある。この達成感を得ることを可能にしているのがドイツ語、すなわち、私が大学で出会った、新しい言語である。この「新しい言語との出会い」こそが、私にとって大学生活で大きな意味をもたらしたのだ。

哲学専修に進む生徒はフランス語かドイツ語を取らねばならないという理由から、一回生のときに第二言語としてドイツ語を選択した。ただ淡々とドイツ語の授業を受けて1年半が過ぎた頃、ドイツのハンブルグ大学でのサマースクールの生徒を募集していることを授業で知らされる。これは国際文化学部が提携しているハンブルグ大学に、一ヶ月間語学留学をするというものである。「ドイツに行ってみたい」「ドイツ語を現地で学んでみたい」と思い、早速参加希望を出した。そして、運良くサマースクールに参加できることになり、7月末にハンブルグへと旅立ったのである。

国際線の飛行機に一人で乗るのも、寮で生活するのも初めてだった私にとって、ドイツでの一ヶ月は緊張もしたが、興奮と発見の連続だった。午前中は日本人の先生の文法の授業を受け、午後からは能力別クラスでドイツ人の先生の授業を受ける。その後、日本語を学んでいるドイツ人の大学生とドイツ語で会話することを原則として、宿題やゲームをする。これが月曜から金曜まで繰り返され、土日には近くの都市まで出掛けたりした。最初に驚いたのは自分の語学力の無さだった。覚えている単語数の少なさもさることながら、聞き取りがほとんどできず、何度も聞き返した。一年半の成果がこれかと思うと、恥ずかしさと情けなさでいっぱいだった。自分の自信なんてちっぽけなものだと思い知らされた。だが、こんな自分を何とかしたいと思って勉強した。ほんの少しづつだが、ネイティブの先生の話している内容がわかるようになった時、本当に嬉しいと思った。そして、たどたどしくはあるが、ドイツ人の学生にドイツ語で話しかけ、相手が理解してくれ、言葉を返してくれた時、今までに無いほど興奮した。言葉が伝わるということはこんなにも楽しいことなのかな。

言葉が相手に伝わって、返ってくるということは、同じ世界が開けるということであり、その世界を共有することに他ならない。私はドイツ語で会話できた瞬間に、新しい空間への扉が開かれたような気がした。その空間には、生きたドイツ語を使う人々、ドイツという国歴史や文化を背負った人々がいる。そこに入り、それらの人々と気持ちや考えを共有するためには、言語というツールが必要なのである。そして、その言語を自分が使用できなくてはならない。言語は使用されることによって、その存在意義が与えられる。挨拶をする、買い物をする、駅員に列車を聞く、カフェでお茶を飲むなどといった日常行為を

ドイツ語で行なう。伝わりにくいことが多いが、真剣にゆっくり正確に繰り返せば、相手はこちらの真剣さを汲み取って、聞き取ってくれる。そして、こちらが言いたいことが相手に伝わった時、嬉しさと達成感を覚える。同じ言語を使えることはこんなに楽しいことなのかと思うと、病み付きになる。

同じ寮に入っていた子の中には台湾や韓国から来ている子もいて、夕飯を一緒に作ったり、おしゃべりしたりした。お互いドイツ語を学ぶ身なので、コミュニケーションはできるだけドイツ語を使う。辞書を片手にご飯を食べ、ジェスチャーを交えて話す、どう訳していくか分からぬ言葉があれば、辞書を引く。それでも分からなければ英語を引く、そして、自分の言語に翻訳する。その繰り返しである。韓国語はまったくわからなかつたが、ドイツ語で韓国人と繋がることができるというのは、すごく不思議なことだ。母国語でなくとも、世界共有することができるということを体感した。その時にできた友達は今でも連絡を取り合っている。翌月に韓国旅行をした際には、韓国人の友達がソウルを案内してくれ、家に泊めてくれた。ドイツ人の学生の何人かはその後日本に一年間留学したので、一緒に遊びに行ったり、パーティーをしたりした。そのうち数名は神戸大学に留学してきたので、学校でも会うことができた。世界中どこにいても、ネット環境さえあれば、メールやチャットができるし、手紙のやりとりやプレゼントを贈り合うこともできる。一ヶ月という短い期間ではあったが、本当にかけがえのない経験ができたと思う。「生きた」ドイツ語にふれること、その国で暮らし、その国を体感すること、国境を越えて同じ言語によって世界を共有すること。これらを学び、ドイツ語をもっと勉強したいと強く思い、日本に帰国した。

日本に帰ってきてから、もう一つの「出会い」があった。それは言語の共通性である。ドイツ語を学ぶうちに、他の言語も知りたくなり、フランス語を独学で少し勉強してみた。それから、フランス語と似ているようだと思い、イタリア語を半期受講してみた。そして、現在はギリシア語の授業を受けている。私が哲学の授業で使う言語はドイツ語と英語が大半ではあるが、演習によっては独訳と从訳、独訳と英訳の両方を対照する場合もある。その理由の一つには、原著を他言語に訳す際に、よりわかりやすく噛み砕いて解釈し直されていることがあると言えよう。

少しかじっただけでも、ヨーロッパの言語は共通性をもつことがよくわかる。フランス語とイタリア語は単語がよく似ている。また、ヨーロッパでなくとも、英語とドイツ語が似通った単語を示すときもある。それは同じラテン語やギリシア語から派生した言語だからである。哲学者の原著を読むとき、語源を辿ることで、私はより深い理解へと結び付けられる。例えば、ドイツ語の ‘ästhetisch’ という語がある。これは、「美的な」と訳される、美学用語の中では頻出単語の一つだと思われるドイツ語である。この語には歴史がある。元々は ‘aisthetisch’ であり、ギリシア語の ‘αἰσθητόν’ に由来している。これは「知覚できるもの」を意味している。すなわち、「美的な」ものとは、感覚で認知できるものであり、それを語源としていることから、美とは感覚できないものを含まないと言うことが

できよう。また、カントは、バウムガルテンが最初に使った‘ästhetisch’という語を『純粹理性批判』において、「感性的」という意味で使おうとした。しかし、これは『判断力批判』では「美的な」という意味で使われることもある。

哲学者がある単語を使う時、その単語が初めて使用された時の意味や、それまで使われてきた意味、語源などをたどった上で、その単語は使用される。それゆえ、哲学を勉強しようとする私たちも同様の道筋をたどらねばならない。一つの単語を調べるだけで、その語のたどってきた歴史を知ることができる。逆に言えば、単語一つでこんなにも奥が深いということである。日本語訳を読むだけでは気付くことができない世界がそこにはある。

哲学は古代ギリシアから続く学問である。その長い歴史から見れば、西洋哲学が日本に輸入されてから日も浅く、輸入当初は訳語に大変な苦労があったと思われる。西周が‘philosophy’を「希哲学」と訳したことから「哲学」という訳語が採用されるようになった。元々日本語になかった言葉や概念を訳す作業がいかに大変だったかは想像にたやすい。現在、私たちはそういった言葉を使うことができる。しかし、本当の意味でその語を理解するためには、やはり原語を調べなければならない。英語の‘philosophy’は、ギリシア語の‘philosophia(愛知)’、‘φιλοσοφία(愛する)’と‘σοφία(知)’に由来する。

これは、ドイツ語にとどまるだけではない。私がドイツで開きえた世界は、ドイツ語の世界、またはドイツ語と日本語の世界だけだったが、他の言語を学ぶうちに、言語間の扉が開かれ、世界が次々と連なっていくような瞬間を体験した。その瞬間は突然訪れる。辞書で単語を調べている時、論文を読んでいる時、教授の講義を聞いている時、などさまざまである。その世界の連関を発見した時、ネットワークとして言語はつながっているのだと実感させられる。

二回生のときに出会った、生きたドイツ語とその世界の体験は、私に言語を学ぶことの楽しさを教えてくれた。そして、そのことがきっかけとなって、他の言語に触れた時、ドイツ語の世界は広がりを持ち、他言語との連関を持った世界を私が発見するに至った。ドイツ語の世界もその連関も元々あったものである。しかし、私はドイツに行くまで実感することも、体験することもなかったのだ。実体験は非常に強い力を持っている。私に直接働きかけ、感覚を揺さぶる。この体験がなければ、語学の楽しさを発見することはいぶん先になったかもしれない。運悪く発見できないこともあったかもしれない。発見できなければ、今なお日本語の訳語にとどまって、新しい世界の扉を開くことができなかつたかもしれない。新しい言語を学ぶことができ、そこから新しい世界を開き、自分の学問を深めることができたことが、この大学に来て得ることができた最高のものの一つだと自信を持って言うことができる。

私は現在、大学院への進学を目指している。新しい世界はまだまだ奥が深く、魅力的である。一つを知ることで繋がっていく世界の広がりをもっと体験したいし、私自身の世界を広げていきたいからだ。知りたいという知的欲求は誰にも止められない。「知を愛する」という原義を持つ哲学は、まさにその欲求を体現するものである。私は大学で出会えたこ

の言語とその世界を、そして、その世界を広げてくれた哲学という学問をこれからも研究していきたい。願わくは、この私が経験したような新しい世界の発見を多くの人にしてもらいたいと思うし、その手助けができるような仕事につきたいと思っている。このような「出会い」を多くの人ができることを願うとともに、その「出会い」を経験できたことに感謝したい。

最優秀感動賞

韓国留学を通して

05800511

東洋史学専修 3回生 田中寛樹

2006年8月末。一人の日本人が韓半島の南の端、全羅南道の木浦という所にやって来た。彼は自分どんな存在になり得るのか、将来社会にどんな貢献をして生きる人間になるのかが見えず、悩んでいた。また初めての外国でしかも一年間の留学、無事にやってけるのか不安で一杯だった。

関西空港で先輩、友達、母、弟に見送ってもらった。黙っていたら張り裂けそうな胸のうちを高笑いでごまかして、搭乗口を後にした。さあこれから一年は帰らない。

元来、外交的な性格ではない。だがきっかけがあれば思い切って切り込んでいく。いろんなことに興味は持つが飽きっぽい、一つのことをずっとやるのが苦手。雰囲気にのまれやすい。弱冠十九の身でありながら、自分のことはよく分かっているつもりだった。

思ったより韓国は近かった。飛行機なら 2 時間弱。仁川空港に降り立つ。ここからが一苦労。なにしろ標識のハングルが全く読めない。学校では一学期の間だけ第三外国語で学習していたが、そのときは留学のことを全く考えていなかった。発音は分かるが、意味が分からぬ。したがって道を尋ねる。円からウォンに換金してもらう。切符を買う。誰かを頼ることにいちいち体力を使った。留学の初めはこんなの当たり前かもしれないし、つらいと感じる心の余裕は無かった。ただ空港でさっそく押し売りに合い、日本人としての洗礼を受けた。

そこから行き先と合っているかよく分からないバスに揺られること 6 時間。木浦に到着した。迎えに来てくれたのは歴史学科の助教先生、日本語学科の元生徒会長と現生徒会長。とりあえずご飯を食べに行く。ビビンパックが辛すぎて食べられなかつたので代わりに辛くない冷麺を頼んだものの、予想していたものと味が全く違い、思わず口から戻しそうになった。そのとき改めてろくに準備をせずとんでもない所に来てしまったと感じた。食べ物が全く合わない、会話が一切聞き取れない。生徒会長にはそれでよく留学する気になったね、と言われる始末。

日用品を買い揃え、寄宿舎に到着。ルームメイトはネパール人だという。韓国まで来てなぜネパールなのか、不満を言う余裕は無かった。机に飾られたヒンドゥーの象さんの神様をぼ～と眺めていた。その日シャワーは温水が出ず、この時ばかりは気が変になりそうだった。それから学校が始まるまでの数日は、買い物や散策で時間をつぶした。

韓国の大学の学期初めはかまびすしい。日本の大学での事務のような事はすべて助教先生がいる部屋で行うため、ひっきりなしに電話が来て、生徒もわんさか押し寄せる。それを大学院生である助教先生一人でほとんどこなしている。「田中君ね？！ご苦労さま！！」このパワー、一年後、俺は一体どうなっているのか。

韓国の大学校という名称は日本の大学の学部と同じ単位。その中で自分が所属する木浦大学人文大学校の集会の席上、日本語学科の会長の紹介に預かり、自己紹介することになった。不思議と大勢の前では緊張しなくなる自分だったが、200人くらいの前で韓国語での挨拶はやはりぎこちなかった。小さなアンニョンハセヨの挨拶にこれでもかというぐらい元気な反応。韓国の大学生は元気だ。このメンバーと一年間共に勉強することになるんだ。

自分の指導教授の朴ヒヨクスン先生は日本語が使える温厚な先生。自分のつたない韓国語にいちいちうなずき、緊張をほぐしてくれる。韓国語の授業と平行して二つの歴史の授業をとることになった。

日本語学科のメンバーを紹介してもらう。みんな日本語をしっかりと勉強している。ここ的学生はまじめな人が多い。やっと同年代の友達が何人かできた。さっそく質問攻めに合う。日本の自動車メーカー、歌手、国際事情、古文解釈、ほとんど答えられない、彼らは日本のことによく知っている。日本に興味がある学科なので詳しいはずだが、日本人の自分が答えられないのはどうだろうか。逆に彼らは自分達の国のことを見るのは上手だ。彼らは「私達の国」という意味で「ウリナラ」という。彼らの会話中にはこのウリナラが頻出する。日本語にも「わが国」という言葉があるが、あまり使わない。彼らは愛国心が旺盛だ。愛国心という意味の「エグクシン」という言葉もちゃんとあるくらいだ。そこら中かしこに国旗が掲揚されている。サークルの部室には「祖国統一」の額。

韓国の大学生の男女はすごく仲がいい。基本的にみんなお互いの名前を知っている。女性は男性の先輩のことを血がつながってなくても「お兄ちゃん」と呼ぶ。大体同学年でも男性の方が女性より2、3歳年上である。これは徴兵制があるためであり、男子は20歳～30歳までの間の2年間、軍隊や公務につく義務がある。その為か韓国の男性の中には大人びた人が多い。大学一年生を終えてから軍役につく人が割と多い。軍役はやはり、自分の体で国を守るという意識のきっかけになったり、ほんとうに自分がやらなければならないことを考える時間になったりとか、上下関係をしっかりと学べ、社会に出る準備が出来る、軍隊に行って帰ってきてこそ男、だとか。いろいろ話を聞いているうちにやはり日本人では得られないものを手にいれるんだろうかと少しうらやましい気がした。一方で軍隊で何かを得てくるかどうかはその人次第、やはり軍隊は存在するべきではない、という人もいた。韓国の場合は、北に住んでいる同族との戦争が終わっていないというやむにやまれぬ

事情がある。しかし、どんなに理想だと言われても最終的に軍隊は存在すべきではない。またそうなる努力をするべきではないだろうか。軍隊を持つ必要の無い国は。そんな国、今の世の中には少ないかも知れないが。

授業は案の定さっぱりと分からない。どうやら半島分断の内容を扱っているらしいのだが、自分は開く教科書の名前は「ミニマム韓国語」。こんな留学プログラムがあつていいのだろうか、と思った。どうやら教授とのコミュニケーションは上手くいったみたいだ。日本語で書かれた書籍を見せ、この感想文を書けと課題を出してくれた。もちろん韓国語でだ。わが木浦大学の歴史文化学科は教授陣の優秀さが評判であり、韓国人からしてもその講義は難しくも、おもしろいのだそうだ。つまりちょっとひねった授業が多い。それに対し挑むは韓国語歴半年の日本人。自分でも少し笑えた。

男性は男性である以上、男らしさからは逃れられない。ここはサッカーグラウンド。だとしたらやることは一つ。韓国男性が心から愛する球技、サッカー。新しい日本人はどんなもんか、試されているのか。球技は割りと好きだが、サッカーはあまり自信が無かった。徹底的にやることが好きな韓国人、試合はもちろん 30 分ハーフをはさんだ 90 分ゲーム。次の日、足を引きずって登校した。

彼らは友達に遠慮をしない。そしてそれこそが私が彼らをもっとも愛する部分である。日本人だからこそ、その部分が特別に見え、好意的に映るのかもしれない。ある日、ルームメイトのネパール人、ラジュに珍客が訪れた。歳は四十半ばの韓国人。この前ラジュとの約束をすっぽかしてしまい、謝罪がてら一杯やりにきたのだという。手には韓国焼酎イプセジュとチキン山盛りのボックス。というか韓国語の出来ないラジュに彼と約束をした意識があったことかさえ定かではない。さらにラジュはお酒が飲めない。彼は来客の強引な押し切りに屈して、紙コップを受け取った。そして自分もちゃっかり便乗した。しかし事態は思ぬ方向に向かった。たった一杯の酒で完全に酔っ払ったラジュは、話題がネパールの動物の話に及ぶと、とたんに饒舌になり始めたのだ。使う言語はネパーリーイングリッシュ・フィーチャリングコリアンとでも名づけておこうか。コミュニケーションは時に言語の壁を突き抜ける。人と関わるときに韓国語の上手さばかりを気にしていた自分には革命的な事件だった。

その場で崩れそうになったときもあった。言葉が少ししか伝わらないコミュニケーションには限界がある。外国人のめずらしさに最初は人が寄ってくるが長く引き止めておくことが出来なかつた。彼らの大半は興味本位。話す度ごとに体力を使うのはごめんなのだ。人間的魅力な問題かもしれないが、やはり韓国語は必死にやつた。当たり前かも知れないが、逃げることが嫌だった。友達と親しくなる方法もいくつか考えた。一つはネット上のつながり。彼らはパソコンの前に座ると必ずといっていいほど「ネイトン」というメッセンジャーを起動する。そこで友達を会話をするのだ。また近年、日本でも流行しているソーシャルネットワーキングサービスも韓国では前から人気があった。自分のミニホームページを作つてそれを媒体に友人とコミュニケーションや、自分のことを伝える道具にするのだ。自分もさっそく作った。

もう一つの付き合い方。それはお酒。自慢ではないが韓国に来てから自分の酒飲みの本性が開花したようだった。無理やり飲まされて（日本では犯罪だが）酔う。するとなぜか韓国語が流暢になる。会話がスムーズに運ぶ。話したことの無い韓国人と自然に会話をしていた。新しい自分の引き出し方を学んだ気がした。

さらにカラオケだ。韓国ではノレバンという。安い値段で手軽に入れることから、よく一人で入って韓国語の歌を練習した。日本の歌もたくさんあり、韓国でも「リンダリンダ」を熱唱することになった。韓国ではXJAPANや中島美嘉、安室奈美恵といった日本人歌手も大変な人気を獲得していた。しかし自分は歌えないので、よくおねだりされて困った。

大学の裏門から出ると、そこは食堂や酒場や印刷屋、コンビニ、ネットカフェが密集しており、田舎における学生の不満の受け皿的役割を果たしていた（こんな書き方したら失礼か）というより充分だった。そこで一軒の酒屋を縁を結ぶことになって自分の留学生活は徐々に方向性を帯びていく。

その主人はアマチュアドラマー、暇なときはずっと練習用ドラムを叩いている。ドイツに留学経験があり、その体験談を語ってくれた。最初の半年はずっと韓国人と一緒にいて、全く語学が上達しなかったが、残り半年で自分から現地の人間に交わって彼らとずっと遊んでいたら、話せるようになっていた、と。要は覚えたい言語しか使えない人間と友達になって、その人たちとずっと遊べということだ。そこから、酒屋に来るお客様（主に女性客）の話相手をさせられた。馬鹿みたいに飲んで歌って大騒ぎする日々が続いた。

韓国語の授業は週に4回あった。そのうち半分は中国人留学生が先生だった。生徒の大部分は中国人だったので授業中はよく中国語が飛び交った。やった。これで中国語も出来て一石二鳥だ、なんて余裕があるわけなく、授業以外の時間で一人、皆を出し抜いてやろうとコソコソ韓国語に没頭した。

韓国では旧正月と旧盆が大事な日でそれぞれ名節（ミョンジョン）と秋夕（チュソク）といつて、親族一同集まる記念日だ。チュソクの日、寄宿舎では飯が出ないという噂がたつた。なぜならば給仕のおばちゃんたちがみんな田舎に帰ってしまうからだ。打開策（？）を検討した結果、韓国人の友達ヒョンジュンの家に泊まって、実際に秋夕を経験させてもらうことにした。ヒョンジュンの父が親族の兄弟の中で長男だったため、親族皆ヒョンジュンの家に来ることになった。自分にしてみたらちょっとしたホームステイ with その親戚一同だ。少し緊張した。さらにこの日は先祖を祭るというのが本来の意義なので日本人の自分が同席するのは少し気が引けた。

ヒョンジュンの父親は語気の荒さの中にも優しさを持った人だった。飯を食わせてもらっている自分を見て、「男はもっと食わんか」と叱咤してくれた。そして秋夕のメイン、先祖に対する祭祀が始まった。テーブルに肉、酒（マッコリ）、果物、野菜等を豪勢に盛り付け、男性だけが、お辞儀をする。そして30分くらいいたら、自分達でその食べ物を始末してしまう。そのあと、家を出て向かったのは、先祖代々とヒョンジュンの前の母の墓。土で盛り上がった墓にひざまずいて礼をする。母の墓には自分もお礼させてもらえた。友達の母の墓なら血がつながらない人間もお辞儀をしていいそうだ。よく分かっていない自分の無様なお辞儀に、男兄弟は笑いころげた。一人ヒョンジュンの父が微笑をたたえて杯を差し出した。「飲め」と。なみなみと注がれるマッコリは果物の芳醇な香りがした。一気に飲み干すと自然に笑みがこぼれた。それを見て父も豪快に笑った。みんな笑った。人間と人間。国籍は違う。でも確かに、人と人だ。

冬は意外と早くやってきた。木浦の大学生はそれぞれの故郷に帰り、バイト、勉強にいそしむ。自分はソウルで語学堂に通うことにした。下宿先も見つかり、ソウル生活が始まつた。やはり木浦では都会でない分、韓国のあるままを見れた気がした。しかしこソウルもまぎれもなく韓国であり、その首都だ。様々な人が集まる。日本人もたくさんいた。皆様々な生活の事情を抱えて、都会に溶け込んでいた。

とある酒屋があった。韓日交流バーと題うつて週に2回パーティが開かれるのだ。その酒場の名前は「ハナ」。日本語では「一つ」という意味。外国人との交流を目的に作られた酒屋で、自分も週2回ハナに入り浸っていたわけだ。

そこで、たくさんの人と知り合えた。在日韓国人の人、大統領官邸を守る警備員、日本の外交官員、ジャズシンガー、大阪鶴橋でアルバイトをしていた韓国人、同級生の日本人、女優、軍人、数え切れない人と出会つた。ソウルという場所でも韓国語とお酒を通して、たくさん的人生を知つた。一生の友達が出来た。叶いそうにない恋も全力投球した（笑）。毎日が濃く、充実していた。

二ヶ月の冬休みが終わり、新学期を迎えようとしていた。この時期は新一年生が入り、改めて自己紹介しなければならない。しかし半年前の自分とはケタが違つた。ソウルでも二ヶ月いろんなところ（？）で韓国語を学び、相当レベルアップしていたのだから。それでもやはりまだ自分の実力不足を感じずにはいられなかつた事があつた。

MTというイベントで起つた出来事だった。MTとは新しく入つた一年生が学科に溶け込みやすいように二泊三日で合宿をするというイベントで軍隊式のトレーニングも行う。そのトレーニングのとき、よく分かつてない自分の前に指揮官の先輩が立ち止まつた。無言でこっちを見つめている。しかし自分はみんなの動作に合わせて動かねばならない。その動作が自分から見てもぎこちなかつた。突然指揮官が大声で「ヨレッ」と怒鳴つた。何を言つてゐるのか分からず、とりあえず近寄つた。そしたらまた韓国語でまくし立てられた。友達が小声で教えてくれた。「ヨレ」→「ヨル+ウェ」→「列（ヨル）+外（ウェ）」つまり列から出ろ、という意味らしかつた。妙に納得した。

韓国的学生はイベントのあと、必ず酒盛りになる。軍隊式の訓練後のビールは格別だつた。すると前の指揮官がまた寄つてきた。また列から追い出されるのかと思って緊張してたら、近寄るなり謝つてきた。日本人であることを知らずにやつてしまつたと。いや、というか韓国語がちゃんとできるわけでもないのに、あの訓練に参加させてもらった自分の責任だと話した。この先輩は後の期末レポートで大変力になつてくれることになる。

自分の実力不足を実感したのはこのあとだ。翌日自分は風邪で寝込んでしまい、同じ部屋の友達の会話に耳を傾けていた。そこには自分の韓国語の不足を惜しそうに話す後輩の声があつた。私は寝てると思い込んでいたのだろう。遠慮なしにその後輩は続ける。「初対面の時はもっと話せると思ったのに」悔しくて涙が出そうになつた。そんな感じに見られていたなんて。皆はキャンプファイアに出かけた。一人部屋に残つた自分は母親に電話をかけた。「半年もここにおるのに、何やってんねやろ。今自分がものすごくしょぼい人間に見える」「あんたが一生懸命やつてることを私は知つてるし、しょぼいなんかおもわへん。大事なんはこの悔しさを忘れへんことやろ？今日のことばねにして、明日からまた頑張り」「そかな」電話から聞こえてくる母の声はやっぱりいつもと変わらない。それでも自分が折れそうになつてゐるのを支えようとしてる気持ちは伝わつた。

自分は立ち直りがめちやはやい。キャンプファイアーを終えて酒盛りしているみんなのところに急行した。風邪はもういいのか？と聞かれれば酒を飲めば治ると答えた。班ごとに出し物をして競うコーナーがあった。我が班はまだ決まっていなかった。自分が一人で歌を歌うことを提案した。あのときの後輩も賛同した。歌ったのはポルノグラフィティの「アポロ」およそ百五十人の前で小ライブだった。風邪でしゃがれた声を出し切って、あちこち飛び跳ねて歌った。みんなはヒロキがイカれたとでも思つただろうか。いや、これが俺、これが田中寛樹の真骨頂(笑) 出し物が全て終わった後、助教先生がMVPの班としてわが班を発表した。班を代表して、自分が賞金を頂いた。自分だけのものじやないと言うと、あの後輩が笑いながら「じやあそのお金であたし達にごちそうしてください、そしたら納得します」と。それもそうだな、帰ったら焼肉だ、と思った。

済州島。アジアの宝石。歴史学科の研修旅行でその地を初めて訪れた。船に乗ること5時間。その美しき島は観光地として年々進化しているように見えた。しかしこの美しき島にも世界大戦の傷跡が鮮明に残されていた。日本軍が作った地下要塞を訪れた。資料館を見学している途中、女性の先輩がどんな気持ちだ？と尋ねてきた。答えようが無く、黙っていると、反省してるの？と聞いてきた。しまいには反省しろ、と言ってきた。違う先輩が入ってきて、その会話にユーモアを交えて冗談してくれたが、結構ショックだった。俺が何をしたっていうんだ。その日の夜、恒例の酒盛りで親しい先輩に話をした。その日の出来事を。先輩はその時の会話は半分冗談、半分本気だと答えた。確かに現在の韓国の若い人には日本を好きな人が増えているが、だからといって昔のことを絶対に忘れる事はない、と。確かに忘れることが良いことだとは決して思わない。お互いの感情を大事にした上で歩み寄る努力、知ろうとする努力が大事だ。しかし彼らに好かれる努力をしようとは思わない。ただ自分らしくふるまい、彼らの人間的な信頼を勝ち取るのみだ。そんな身近な友達を通して初めて彼らは日本という国をも信頼できるようになるのだから。

後期は韓国の古代史の授業も受けていた。高句麗、百済、新羅、伽耶、渤海、どこかで聞いたことがある名前がこの授業の主人公だ。それにしても韓国の授業風景ってどうしてこうもにぎやかなのか。笑いが絶えない、教授の質問が簡単であれば、皆元気に答える。難しくてもとりあえず挙手して、何かしら話す。歴史学科であるということもあるが、皆自分の国歴史にとても詳しい。自国の歴史に詳しいのが立派だなんて書くのは変かもしれないが。古代から、近現代に至るまで、皆物知りだ。そのメンバーたちと古代史の授業を受けるのは、なかなか大変だ。なにしろ半島の歴史をメインに勉強したことがない。高校のときも日本と関わりがある部分だけ出てきたくらい。ウィマンとかキムチュンチュとか、見知らぬ名前の人物が主人公。知識が全く足りない。

しかしこの授業で使う教科書を通して、韓国語がさらに伸びたのは云うまでもない。おかげで韓国語の論文を時間はかかるが読解できるようになった。毎回レポート提出と小テスト。頭が痛くなるようなときも多々あった。しかし「ヨレッ」の先輩や他にも親切な先輩の助けも借りて、多くのことを学ぶことができた。

韓国の留学生活が残り少なになってきたある日、二人の後輩と親しくなった。一人は日本人でありながら、韓国で幼、小、中、高校と通い、韓国語はべらべらで日本語を習い直しているという子、もう一人は、韓国人で日本のアニメが大好きで将来の夢は声優だ。二人は大の仲良しなのだが、ある日声優の方が行方不明になった。親友にも連絡が繋がらないという。すると突然、声優が公衆電話からかけてきて二人で会いたい、と言ってきた。とにかく行くしかない。聞くところによると警察からの捜索願いも出されているそうで、そんな子と二人で会うには少し気が引けた。約束時間から遅れること一時間。彼女はやってきた。いつものメイド服に魔法少女が変身用に携帯しているようなアクセサリー。これが家出中の格好。父親と意見が合わず、家を飛び出し、友達の家を転々として、なんと一ヶ月経つのだそうだ。取り合えず助教先生に連絡をつなげ、事態は鎮静化していった。彼女には日本に来たときは、我が家を尋ねるようにと住所を渡した。いろんな境遇で生きている人間がいる。目が覚める体験だった。

韓国留学期間終了。いろんな友達、先輩、教授と別れの酒を交わし、再会を誓った。思えば感慨深いものがあった。全く話せなかつた自分が今は韓国人と二人きりで会話に困らないようになっていたのだから。またいろんな人生に触れる中で、自分の価値観、世界観も大きく変わった。日本に帰った後の自分が楽しみで仕方なかった。この経験があとでものを言うのだと予想した。2週間はソウル近郊や釜山で友達を会った。一年間、正確には10ヶ月での韓国留学期間が、人間として必要なもの、これから役立つ知識、そして何よりもたくさんの友達を自分に与えてくれたのだ。

帰りはぶさんから19時間かけて大阪港に到着した。船上で知り合った韓国人2人と、瀬戸内海を眺めながらキリンビールで乾杯した。一人は彼女に会いに山形に向かう途中だと言う。もう一人は軍人で、道頓堀で働く母に会うために休暇をもらって来たのだと言う。

再会を誓って別れた。

久しぶりの大坂だった。関西弁が心に染み入った。でもあの国に比べると、ちょっと顔に元気がない人が多い。日本は忙しすぎると誰かが言ってた。自分ももうすぐこの國の人間に戻る。でも今までの経験・仲間との思い出が、何物にも代えがたい力になって支えてくれることは分かっていた。

優秀感動賞

すべての「出会い」に感謝しよう

社会学専修4回生 0460086L 百武由加里

私は大学に入学し、ストリートダンスを始めた。

ストリートダンスとの「出会い」は高校生のとき。幼いときから音楽ばかりやっていた私は、高校時代の吹奏楽部でのミュージカルで、また、体育祭の応援団対抗の出し物でダンスに出会った。

そして、大学に入ってからの友人との「出会い」。その友人と恐る恐る見学しに行ったダンスサークル JETTER(ジェッター)との「出会い」。

ここからすべては始まった。

まず一つ目は京阪神大学ダンスサークル連盟 SYMBOL(シンボル)との「出会い」。

この連盟は、まだ歴史が浅く、孤立しがちな大学間のストリートダンスサークルの繋がりを作ろう、また、大学間の交流によってダンスのスキル向上や仲間作りを促進しようというものである。私の所属する JETTER も SYMBOL に加盟している。SYMBOL に興味をもった私は、大学を代表し SYMBOL を動かすメンバーの一人となった。

SYMBOL での活動は練習会の実施、各種交流会の企画など多様だったが、メインとなつたのは加盟する神戸の大学ダンスサークル合同によるイベント「SYMBOL KOBE」の開催である。私は第二回、第三回開催に関わった。主な仕事は会場の内装整備、また、SYMBOL ならではの内装による大学のコラボレーションを企画、展示などを行うというものだった。また、第三回開催では、自分から何か働きかけたい！少しでも世の中の役に立てたら…と思い、「古着を途上国に贈ろう」という企画を実施した。入場者にはイベントの告知と同時に来場の際に古着を持参してもらうように呼びかけ、運営スタッフ内から多くの古着を集めた。協力してくれたみなさんのおかげで、大量の古着を寄付することができた。

そんな SYMBOL での活動を通して、私の人生を変えたといつても過言ではない出会いがある。

SYMBOL 関西のリーダーで同志社大学ダンスサークル soul2soul(ソウルツーソウル)の部長である、石田育男氏との「出会い」、そして、彼が考案し、企画し始めていた大学生 NO.1 ストリートダンスコンテスト BUZZ STYLE(バズスタイル)との「出会い」である。石田氏からこのコンテストの話を持ちかけられたとき、私の気持ちは最高潮に高ぶっていた。彼は尊敬する先輩だった。そんな彼の下で私が少しでも彼の力になれるのならば、ぜひお手伝いしたい。そして、彼の知恵や考え方を近くで学び、自分を高めたい。そんな思いがこみ上げてきた。

そして、このコンテストを世に送り出すことで、何らかの価値を創造し、世の中に影響を与えていきたい。そう純粋に思った。

このコンテストは全国六地区で予選を行い、それぞれの地区から大阪で開催される本選に代表チームを招待する、というものだ。この試みは史上初。しかも、大学生のみの手に

よるものだ。石田氏はレオパレス 21 の「夢応援プロジェクト」に応募し、この企画を提案した結果、優勝し、賞金 1 0 0 0 万円を獲得した。新聞をはじめとする各種メディアにも取り上げていただくことができた。

ほかのスポーツをしている学生と同じくらい、もしかするとそれ以上に、日夜練習に励んでいる学生ダンサー(練習時間は一日平均 3 時間というデータもある)。しかし、ストリートダンスには学生の全国大会が存在せず、発表の場に乏しいのが現状である。そこで、全国大会がないのならば、作ってしまおう! という考えから生まれた全国大会である。

また、この大会ではストリートダンサーのマナー問題に正面から取り組んでおり、ストリートダンスを社会に認められるものにしていこうという考え方がある。

私は九州予選と会議係(会議会場押さえ、議事録作り)を担当した。有能な後輩がサポートしてくれたおかげでなんとかやり遂げることができた。

すべてが 0 からのスタート。試行錯誤の連続で、なにもかもが手探りだった。

九州で予選をするにも、何のあてもなく、まずは九州のダンスシーンの状況を把握することから始まった。インターネット、とくに SNS (ソーシャルネットワーキングサービス) を使い、大学のコミュニティを見つけては、情報を求める日が続いた。なんとか偶然にも福岡や熊本、九州各地で私たちの考えに賛同してくれるひとを見つけることができた。実際にもう一人の九州担当と二人で、その方たちに会いに九州に赴いた。そこで私の友人のつてで、九州の有名な大御所ダンサーの方ともお会いすることが出来、一晩中ダンスについて語り明かし、私たちの活動を応援してくださった。

予選を終えてみて思うのだが、この偶然の「出会い」は必然だったようにも思える。

しかし、予選までの道のりは決して平坦ではなかった。

関西と九州。この距離は短くはなかった。現地の協力者の方と意思疎通を図る手段は電話、メール、メッセンジャー。顔の見えないコミュニケーションの難しさを痛感した。なるべくこまめに連絡を取り合うようにしたり、話し方や言葉選びに気を配ったりして、協力者との距離を縮めていった。いまでも友人関係は続いている。

また、私はパソコンが苦手で、大量の書類作りにも頭を悩ませた。エクセル、ワード、パワーポイント。最初ははっきり言って苦痛だった。しかし、苦手だからといっていつまでも避けてはだめだ。そう思い直し、地道にゆっくり使い方を習得していった。「社会人になるための準備やと思えばいい。きっと役に立つから。」という石田氏の言葉は今でも覚えている。今思えば、BUZZ STYLE での活動はすべて社会に出てから役に立つことばかりだと感じる。

そして、サークル活動、勉学、アルバイトとのバランスを取るのが難しかった。特にサークルのみんなにはたくさん心配や、迷惑をかけた。BUZZ STYLE の作業で徹夜する日が続き、体調を崩した。その時期はサークルの引退講演を控えており、同期のサークルの仲間には本当に支えられたと思う。

しかし、BUZZ STYLE を通して、かけがえのないものを得た。そして、人生の糧を得た。何より、素敵な思い出が出来た。

一つ目は地方の仲間との「出会い」だ。私は福岡予選を担当し、東京、仙台予選にスタッフとして参加したのだが、その地区ごとにカラーがあつて、ひとくくりに学生ダンサーといつてもいろいろなひとがいた。居住地、性別、年齢、性格、違うところだらけなのに、「ダンスがすき」それだけでこうして繋がることができたことに感動した。また、予選を回ってみて感じたのは、自分が恵まれているということだ。関西は大阪を中心として全国的に見てもダンスシーンは盛り上っている。練習の成果を仲間と一緒に発表する場は少なうない。ダンススクールも数多くあり、海外から入ってきた最新のダンスを習うことも出来る。しかし、地方ではそうはいかないというのが現状である。BUZZ STYLE では各地区に応援バスを用意し、格安で本選を見に来ることが出来るようにした。また、バスに乗つてきた人たちに対して大阪のダンススクールを斡旋し、情報を提供した。反響は予想以上だった。

この事実を目の当たりにして、BUZZ STYLE の存在意義は運営者私自身が想像する以上に大きいのかもしれないと思った。

二つ目は、学生でも3000人もの人々を動員できた、感動を与えることが出来たという達成感だ。本選を終えて、たくさんの反響があった。一番多かったのは「来年もぜひ開催してください。」だった。この言葉は一番うれしかった。そもそも、この BUZZ STYLE は毎年続いている甲子園のようなものにしたいと石田氏が常々言っていたからだ。私は本選の際にMC(司会者)担当になり、当日はMCさんのお世話、全体進行の把握、常に舞台袖で待機し、問題が起きれば対応するという仕事に就いた。舞台袖から客席を見ると満席。全国各地から Zep Osaka に集った仲間たちがひしめいていた。コンテストの始まりを舞台に映し出された映像とともに観客がカウントダウンし始める声が聞こえると、もう涙をこらえ切れなくなった。今までのスタッフみんなの頑張りが報われる日が来たのだと、肌で感じた。

また、私たちは出演者などの親御さん、また、一般の社会人の方を積極的に招待した。というのは、私たちは学生ダンサーの頑張りを社会の人たちにも見てもらいたかったからだ。本選終了後に実施したアンケートには、ステージで一生懸命踊っている若者を称える言葉が並び、私たちスタッフへの激励や労いのお言葉もいただいた。

そして、私はこの大会を運営することで、人のモチベーションやリーダーシップの問題に興味を持ち、自らの卒業論文のテーマに BUZZ STYLE を取り上げ、組織論の観点などから論じることに決めた。ゼミの担当教員である油井先生にも BUZZ STYLE 本選を見に来ていただくことが出来た。このような、学問と BUZZ STYLE との「出会い」にも感謝しようと思う。

第二回 BUZZ STYLE を行う準備を進めている今、運営スタッフは学生するために、毎

年入れ替わっていくことが避けられないこともあり、BUZZ STYLE 初代代表石田育男氏のアイデンティティが脈々と受け継がれていくようにと、ゆるぎないコンセプトを掲げることになった。最後にこのコンセプトを述べて締めくくろうと思う。

大学生による大学生のための No.1 ストリートダンスコンテスト「BUZZ STYLE」

大学生ストリートダンス史上、初の全国大会を開催する。

ダンスに懸ける情熱を燃え立たせた大学生ダンサーを賞賛すべく

我々の滾る情熱を以って、日本一の称号に相応しい最高の舞台を用意する。

近年、社会から懸念されている現代の若者たち。

そういった若者の力によって、社会に何らかの貢献ができやしないだろうか。

我々『BUZZ STYLE』は、ストリートダンスを通じて社会にアプローチする学生団体である。

全ての企画・運営を大学生のみの手によって行い

「ストリートダンス」と「社会性」

遠くかけ離れたようにみえるこの関係を紡ぎたい。

そして、ストリートダンスシーンに新たな価値を創造し続け、

シーンの向上・発展に寄与することを我々『BUZZ STYLE』最大の使命とする。

Blow up our Zeal& your Zeal

すべての「出会い」に感謝する。